

この調査を成すに当たつて本学附属図書館の中野実氏、有馬純氏に便宜を計つて頂いた。記して感謝の意を表したい。又、貴重な本の閲覧を許して下さいた鹿児島県立図書館、都市市立図書館、鹿児島大学附属図書館にもお礼を申しあげる。

[illegible]

83										82								
7	6	5 3	4	1 2	12 1		12	10	9 10	7	6		4	3	2	12		
名ます	袖を	ちりと	辻堂	朝の色	しつめ	百歳の	戦の	縁にし	草葉の露	敵陣に馳入	答ふれは	伺へは	乱れかゝりたるは	髻髻	着し	引退き	進れしか	
不埋名	袂ヲ	土卜	或ル辻堂	朝ノ花ノ色	縮メ	百戦ノ	戦土ノ	縁ニ	草葉ノ末ノ露霜	敵ニ駈入テ	答へケレハ	問へハ	ハ	乱レカ、リシ有様	髪髻	着テ	引退ク	進マレシカハ

76						75						74					
9	7	6		9	7	6		5	4	9	7	6	5	3 4		1	11 12
備を立	過て	先一手は	叶し	是を聞て	責破られつへしと	無勢にて	放ては	矢を番ひ暫く	胄を	寺にて	継す	長尾越を	嘉兵衛	見るより		追けり	廻る高城志和池に さして
備へテ	打過テ	一手ハ	叶マシ	此ヲキ、	責破ラレツヘウ	味方無勢ニテ	放ツ	矢ヲ取テ打番ヒ暫	骨ヲ	東門ニテ	休メス	長尾越ニ	加兵衛尉	見ルヨリモ	ル者多カリケリ	追掛ル味方ノ勢モ	着テ
鹿は陣に同じ																	
78						77											
	8	5	4	3	2	1 2		11	10 11	4 5	4		3		1		12
報いさるへき	厚恩をは	名門を	暫く戦ふそと	かけたてらるも	掛合	乗りたるか	城戸まで	の三人は	与次右衛門	まに	名乗て出	与右衛門尉	提け出	志和池の	城にそ	遙に見て	軍勢共の
報セサルヘキ	厚恩ヲ	名利ノ門ヲ	暫シ戦フトソ	カケ立ラル者	掛入	垂タル	城戸ノ内マテ	三久ハ	与二右衛門尉	互ニ	名乗テ	与左衛門尉	提ケ	志和地ノ城ノ	城ヘ	遙カ	軍兵共鉄丸ニ當テ
死ス斯處ニ搦手ノ 勢トモノ																	

69			70			71		
3	5	6	7 8	9	1	2	3	6 8
称歎し	指図	仰に差すして	御内意	城主	属しぬる	長千代丸	作左衛門	忠見
稱歎シテ	絵図	ケニモ仰ニタカワ	御意	城主ナリ	属シタル	北郷長千代丸	作左衛門尉	忠兄
前出			都は陣に同じ	都は陣に同じ	都は陣に同じ			忠兄
								申サレタリケレハ
								愚力管見
								煩スヘシ
								尋常
								似タル者歟
								危シ
								有ルヘカラス
								警固
								警衛
								益なかるへし
								6 7
								9
								9
								10 11
								2
								4
								6
								6 8
								3
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9
								11
								12
								1
								2
								3
								7
								8
								9

61											60				
4 5	3	1 2	1	12	11		10	9	8 9	7	6	5	4 5	4	1 11
血は涿鹿の川と成紅	若手の	驚しける	進みしかは	行歩も	中村	少しも	進て	命を限りに	言葉を	刀を振る	堀に	緑兵衛尉	進み争て	先登よ	貴戦ふ 追手の勢 切入らる 源右衛門
屍ハ	若手ノ	驚カセリ	進レシハ	歩行モ	加番中村	ナシカハ少シモ	進ミタル	命限リニ	声ヲ	力ヲ振フ	城ノ堀ニ	孫兵衛尉	進ミ争ヒ	先カケヨ	攻戦ヘハ 三手ノ勢 攻入ラル 源左衛門尉 介乙守筑前頼来 道笑清八筑地藏之
					都は陣に同じ										鹿は拾遺に同じ
64				63				62							
1	9 12		7	6	2 3	2	1	5	4 5	2	1		12	8	6
手勢を催促し	七兵衛	遂にける	埋て	體を	通堅	往還の勢	さへきつて	城に城る 後詰	墓々敷軍	射たりければ	紛れ	翌	宗左衛門	權左衛門尉	波楯を浸せは 討取る所の 夏ノ
潜ニ手勢ヲ催促シテ	七兵衛尉	遂タリケル	埋	骸	通堅等	往来ノ勢	遮リ	城ニ籠ル	墓々敷コト	射タリケレトモ	紛レテ	翌レハ	宗右衛門	權左衛門尉	討取敵ノ 九夏ノ
	鹿は陣に同じ														鹿は陣に同じ 鹿は陣に同じ 鹿は陣に同じ

4 5	敷右衛門尉	藤右衛門尉	鹿は陣に同じ
6	山鹿弥助木田兵左衛門尉	山鹿助市来小八本	
7	神右衛門市田小八	神右衛門尉	
7	七介	七郎	
	少輔	太輔	都は陣に同じ
10 11	鎌田玄	鎌田玄蕃	
10 11	次郎左衛門	次郎右衛門尉	鹿は陣に同じ
11	与兵衛	与兵衛尉	都は陣に同じ
11 12	宮内左衛門尉	谷山宮内左衛門尉	鹿は陣に同じ
12	弥右衛門尉	孫右衛門尉	鹿は陣に同じ
	僭良	讚良	
2	兵衛門尉	兵右衛門尉	鹿は陣に同じ
	兵左衛門尉	兵太左衛門尉	鹿は陣に同じ
3	吉川	吉利	鹿は陣に同じ
3 4	吉利吉兵衛	吉村嘉兵衛尉	
4	市左衛門	市左衛門尉	
	加右衛門	嘉右衛門尉	鹿は陣に同じ
6	丹後守	丹波守	鹿は陣に同じ
8	重木孫右衛門尉	市来孫右衛門尉	
10	鉄兵	鋭兵	

57

58

59

10 11	明地の	明処ハ	鹿は陣に同じ
11	北郷千長丸は	爰ニ北郷長千代丸	
1	御陣を	御陣ニ	鹿は陣に同じ
2	一族には	人々ニハ	都は陣に近い
	喜左衛門	喜左衛門尉	鹿は陣に同じ
	吉太郎	吉次郎	
3	吉右衛門尉	吉左衛門尉	鹿は陣に同じ
	次兵衛	次兵衛尉	鹿は陣に同じ
4	四郎右衛門尉	四郎左衛門尉	鹿は陣に同じ
	藤兵衛尉	勝兵衛尉	
	小吉郎	小次郎	
5	又右衛門尉	文右衛門尉	都は陣に同じ
6	久規	久觀	都は陣に同じ
	左近久近	左京進	
8	太郎兵衛	太郎兵衛尉	鹿は陣に同じ
2	碎くへきとそ	碎キツヘクソ	
6	霧島の御勢	東霧島ノ御陣	
8	関尾	関屋	
	木田弥右衛門	本田弥左衛門	
10	源左衛門頼来	源左衛門尉重保入	

54										53									
3	2	1	7	5	3	2 3	2	1		10	9	8	7	6	5		4	3 4	
穆佐には	次郎左衛門尉入済	元栄	四郎右衛門	騒しかりける	忠臣かな	歸り参りて	上の山	祁答院へそ	待居たり	陰居て	叶し	夜もしらしらと	のかれけり	放ては	去らんもと	怪しめられなは	此を	体なと窺ふに敵早く	勝岡へそ
穆佐ニ	次郎左衛門入道傳	元栄	四郎左衛門 <small>（今）</small>	騒シカリシ	忠貞哉	歸参シテ	三ノ山	祁答院へ	待	隠レ居テ	叶フマシ	夜ハ白 <small>ホノ</small> 々ト	逃レ去リ	放チ	去ラント	アヤシメラレテハ	早	体トモ窺ヒシニ敵	勝岡ヘコソ
	鹿は陣に近い	鹿は陣に同じ	鹿は陣に近い				鹿は陣に近い	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ			（陣はホノく）							
56										55									
4	3	2		1	12		11		10	9	6		5	2	1		11 12	11	4
次郎右衛門尉	休平	助左衛門尉	吉兵衛	半左衛門尉	新五郎		柏原将監	淳清	諸右衛門尉	新左衛門尉長時	入道常雲	元栄	藤兵衛尉	中信	中務少輔	夫より	暫く御休息ましく	東光寺	剛て
次郎左衛門尉	休半	助右衛門尉	吉兵衛尉	半右衛門	新八郎	田弥九郎有栄	柏原将監頼娃弥一	清淳	諸右衛門	新右衛門尉長辰	常雲	元巢	勝兵衛尉	中陪	中務		又	東光坊	剝 <small>ヨスツ</small> テ
鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に近い			鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ		前出	鹿は陣に同じ					鹿は陣に同じ	

49										50									
7	2	3	4	5	6	6	7	8	11	12	1	3	5	8	10				
風説	去りたり	さらし	方そ	とれとて	方へと	祁答院へも	益なふして	面を	ひしぬきけり	丹後	聞我に毫数厘	搦められたも	手縄を	成らんと	兵共	弥右衛門	世の有様を窺ふへし	と	弥右衛門なり
風俗	去レリ	アラシ	方ニソ	取レト	方ヘソ	祁答院ヘソ	益ナシ	四面ヲ	ヒシメキケル	丹波	聞テ我ニ毫釐	カラメラレテモ	手ツカラ縄ヲ	成ナント	兵	弥左衛門	世ノ様ヲ窺ヘシト	テ	弥左衛門
都は陣に同じ	鹿は拾遺に近い									鹿は陣に同じ						鹿は陣に近い			前出
51										52									
11		12		1	4	7			7	8	9		1	2	2	3			
其旨	委く	弥右衛門打諾き	経て	のそみしより	折節に	見聞せる	誼哥 <small>アリカ</small> の説に至るまで	いろ／＼に	感悦浅からず渠か勤	労	兵部左衛門	かゝる事	所川と田との夾に	有そ	二三十人森の中に答	居る			
此旨	委シクソ	弥左衛門少シ打諾	キ	經テ築地彦三郎モ	科ナキ者トテ宥サ	臨ミシヨリモ	折柄ニ	見聞セシ	謳歌ノ説ニ至ル処	一々	不斜渠力勲功	治部左衛門	遁ル、事	所ト川牟田トノア	ハイニテ	アリケルソ	森ノ中ニ二三十人		
				鹿は陣に近い				都は陣に近い				前出	鹿は陣に近い				都は陣に同じ		

3 4	奇に攻ん事は斗かた しとそ	寄手攻ん事ハ計リ	テ	二梶山勝岡北ニ當
4	時に	故ニ		
6	伊集院新左衛門尉			
7	奈良清八三原	奈良原清八上原	鹿は拾遺に近い	
8	勘右衛門	勘右衛門尉	鹿は陣に同じ	7 8
9	白谷	白石	鹿は陣に同じ	8
2	吉右衛門尉	吉左衛門尉	鹿は陣に同じ	9
	山田に	山田二ハ	鹿は陣に近い	日に至て
	休右衛門尉	休兵衛尉中村与左	鹿は陣に近い	四月
		衛門尉野之三谷ニ		下る
		ハ有屋田大炊左衛		義弘主も速に御下國
3	與兵衛尉	門尉	46 47	忠恒公
4	怒松	与左衛尉 ^(ママ)	47	謬に満みてり
5	宗左衛門尉	伊集院如松	8	者共の暗からさる
7	梅北に	宗右衛門	48 48	兵部左衛門尉
8	源太相良	梅北二ハ	4	為にこそ
	同二月	源太夫始良	5	怪しめられは
		潤三月		怪シメラレテハ
				塞くにより
			46	忠恒主も未下向
			2	塞ク是ヨリ
			9	忠恒公モ未タ御下
				向
				脚力
				家康公ヨリモ
				忠恒主へ
				悪逆ヲ企ツ
				下向シ彼逆徒ヲ鎮
				ムヘシトテ
				忠恒主へ引セ給ヒ
				ケル
				日至テ
				同四月
				下ラセ玉ヒケル
				義弘公モ速ニ御下向
				忠恒
				隙ニ充満セリ ^(巻)
				者トモ諳ンスル
				治部左衛門尉
				爲ニソ
				鹿は陣に同じ
				鹿は陣に同じ
				鹿は陣に近い

41											42							
11	11	11	12	1	2		3	4	8		9	12	1	2 3	3	4	6	7
答へて	心に叶す候疾病少し	く平癒候はは	其ま、	なるへし密に打て捨	んにはしかしとはか	る	徒黨に	富野	謀叛	意見あり	帶する身ながら	に異ならず候	行を	悪果なれば	枕と	新左衛門尉	於ては	あらて
北原答テ	意ニ任セス候病疾	少シ平癒セハ	渠ヲ其マ、	ナルヘシ密ニ打テ	捨ンニ如シト相計		徒ニ	富隈	謀逆	異見ヲ問ヒケルニ	衆議區々ニシテ決	シ難シ	帶セル身ナガラモ	ニテコソ候ヘケレ	術ヲ	盡果ナハ	枕ニ	新右衛門尉
鹿は陣に同じ							都は陣に同じ	鹿は陣に近い	都は陣に同じ							都は陣に同じ	都は陣に同じ	
43											44							
8	10	12		1	2 3	4	8	10				12	12		2	44		
況んや小將忠恒主	辯せず譜代相傳の	不忠不名	然るへくは	ましまして候こそ	成るへけれ	思召す	定りける	七日か	東南は	帶		能くあれ共其西に			去る事一里夫より北	城砦ありて直に寄る	に	
況乎忠恒公	辨へス譜代ノ	不忠不義ノ悪名	然ルヘキハ	マシ／＼候ハンコ	成候ヘケレ	思食候ソ	定メケル	一七日か	東南ニ	帶西北ハ平野ニ續	クト云ヘトモ谷々	互ニ入違テ蒐引自	在ナラス	心ヨケレ去トモ其	間	砦アレハ直ニ寄ン	都城ヲ去事一里夫	吉ノ砦アリ扱又東
都は陣に同じ					都は陣に同じ				鹿は陣に同じ			鹿は陣に近い					鹿は陣に近い	

[illegible]

29										28									
10	7	5	4	3 3 4	3	2	1	12	11		9	7	4	3		11	10	9	
忠恒の事	大儀も取繕ふ	ことを	忠恒主	し	疑をはらし進らすへ	聊も	思召れは	信用し	思召	譜代當家の	三成	賜り	文禄元年	義弘公	傲謀	不易の	領し置	秀吉公に	
忠恒公ノ御事ヲ	大儀ヲモ取繕ヒ	事トハ	忠恒公	ヘキ	御疑ヲ発セ進セ候	聊カ	思食ハ	敢テ信用シ	思召ヨリ	譜代ノ	計ヲ運シケル三成	賜フ	文禄年	義弘主	傲訴	一時不易ノ	領シ	秀吉ニ	
										鹿は陣に同じ 都は陣に同じ 都は陣に同じ									
31										30									
11	10	9	7	6	2	12		10		6	5		3			1	12		
合せ御助言	御館に	けるに	事我夢にも	珍戴	賜り	なれとも	座ませす	存せん事は	斯込	普代の	懇意を	なり	つくくと	を	蟪蛄を窺て莫雀の昔	候て	付	肥前肥後豊前豊後	
合テ御介言	御館ノ	ケル然ルニ	事を夢にも	珍載	賜リヌ	也サレトモ	マシマサス	存セントハ	カクテ	氏族ノ	懇切ヲ	ナラセ	一々	ヲ	蟪蛄窺蟬黄雀ノ在	候ハ、	付テ	肥後肥前豊後豊前	
鹿は陣に同じ																			

[illegible]

無下の末	父祖の <small>(ママ)</small>	威左も洋々なり	忠國	没落し肥後の國に在りと	無し	如く	於ては	三郎五郎	義弘公	思ひけるは	生禮を	島津家の	一度に臣の	たんぬへし しかし	馴染て	大幸を	秀吉公	仰せられ
下二末	一時ノ	威光モ洋々タリ	忠国公	没落シテ肥後國ヘ有トハ	ナク	如クニ	於テ	三郎二郎	忠弘公	思ル、ハ <small>(ヲ)</small>	生テ	嶋津ノ	一度小臣ノ	足ルヘシ不知 <small>(如)</small>	馴レ昵ンテ	大事	豊臣秀吉公ノ	仰セラレケレハ
<p style="text-align: center;"> 鹿は陣に同じ 鹿は系図と異なる 鹿は拾遺と異なる </p>																		

朝鮮國	朝鮮	一部前出	鹿は陣に近い
義弘公にしたかはしめ	忠弘公ニ從ハシ	都は陣に同じ	鹿は陣に同じ
只此事を	此事ヲ		
北郷左金五	左金五		
廣く	廣キ		
天文年中	天文年中ニ		
征伐せんため	征センガ為メ		
折ふしことの	折フシコトニ		
血の地	新恩ノ地		鹿は拾遺に近い
斗て	慮リテ		
撰	撰ス		
命か譜代不門の	命也譜代不變ノ		
此時没収せられ	此時ニ没収セラレ		鹿は陣に同じ
一庄に就き	一庄一院		
家を他境の	家地境ノ		都は陣に同じ
ていたらく為し	為体ラク例シ		鹿は陣に同じ
さりと	サレトモ		
争ていらふ	争テカ厭フ		
悲	憂フ		鹿は陣に同じ

書館蔵本『庄内陣記』に同じ表現があるかどうか（掲出部に限って）を注した。

同本の書誌は次のとおりである。

写本（漢字片仮名交り）。一卷一冊（目録「庄内山潜勢之事」以下の本文を欠く）。大本。（縦）二十七・四厘（横）十九・三厘。白茶に桐・丸十字紋を押し出した表紙。題簽「庄内陣記 全」。絵地図一丁。伊集院氏系図七丁。目録三丁。本文十行書き百二十丁（墨及び朱の書き入れがある）。目録の「忠實被勸和降」以下は本文を欠く。

猶お、注では、（都）（鹿）（陣）の略号を用いた。

（注一）繅刻頒布本の前書きによると、都城島津家所蔵本を筆写したもので、原本は延宝年間（一六七三―一六八二）に成立したとのことである（瀬戸山計佐儀氏執筆）。ただし、現存本の成立は拾遺、小川兄弟の塚の逸話に、「貞享年中」（一六八四―一六八七）の開溝を「近比」と表現しているのので、そう言える範囲に成ったと見られる。

（注二）「拾遺」に丸山可澄編の『花押藪』が出ているので、元禄三年（一六九〇）と言える範囲にその「拾遺」までが成り、その後、「追加」が記されたと考えられる。

（注三）改訂が試みられているが、語句の範囲にとどめられているので、対校することによって、互いの誤りを正すことができる。

（注四）島津久光旧蔵の玉里文庫本。北川鐵三校注『島津史料集』（昭和四一年八月刊行）の「庄内陣記」における同氏の解題には「近世の中ごろを降らない」成立とある。

〔校異（異文）表〕

頁	19	20	21
行	5	11	1
都城市立図書館本	威風 家門を 非義の罪を 武徳に まれには聞へける 世こそつて みたせ 已に 浮世を 栖し 文録元年八月朝鮮國 之御惣者也	威 家門ノ 非義ノ前二罪ヲ 武徳ノ マレニ聞ヘケレ 拳世也 ワタラセ 憂世ノ 栖セ 文禄二年八月於朝 鮮国御逝去也	威風 家門を 非義の罪を 武徳に まれには聞へける 世こそつて みたせ 已に 浮世を 栖し 文録元年八月朝鮮國 之御惣者也
鹿兒島県立図書館本	威 家門ノ 非義ノ前二罪ヲ 武徳ノ マレニ聞ヘケレ 拳世也 ワタラセ 憂世ノ 栖セ 文禄二年八月於朝 鮮国御逝去也	威 家門ノ 非義ノ前二罪ヲ 武徳ノ マレニ聞ヘケレ 拳世也 ワタラセ 憂世ノ 栖セ 文禄二年八月於朝 鮮国御逝去也	威風 家門を 非義の罪を 武徳に まれには聞へける 世こそつて みたせ 已に 浮世を 栖し 文録元年八月朝鮮國 之御惣者也
注	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ

『庄内軍記』 都城市立図書館蔵本
鹿児島県立図書館蔵本 校異（異文）表（上）

橋口晋作

ここに校異（異文）表を作成する都城市立図書館蔵本は、昭和五十年八月に都城史談会によつて翻刻され、頒布されたものである。

原本の書誌は次のとおりである。

写本（漢字平仮名交り）。二卷一冊。半紙本。（縦）二十四糎（横）十六・五糎。白茶表紙。題簽「庄内軍記 全」。庄内軍記伝二丁。序一丁。跋一丁。絵地図三丁。目録各卷一丁。本文十三行書き八十五丁（上巻四十丁・下巻四十五丁）。拾遺十七丁。白紙前後に各一丁。

表はこの翻刻頒布本に依つて、その頁・行を目安として作成した。猶お、同本の翻刻は丁寧になされているが、それでも多少の誤りを免れてはいないので、訂正した表現を掲出した（○印を付けてある）ところもある。

一方の鹿児島県立図書館蔵本は東郷吉太郎氏の寄贈を受けたものであるが、都城市立図書館蔵本と同系統本と認められる。

同本の書誌は次のとおりである。

写本（漢字片仮名交り）。二卷一冊。大本。（縦）二十七糎（横）十九

・二糎。水色表紙。題簽「庄内軍記 附拾遺」。扉「庄内軍記 東郷蔵書」。庄内軍記伝一丁。序一丁。跋一丁。絵地図三丁。伊集院氏系図二丁。目録各卷一丁。本文十三行書き六十五丁（上巻三十一丁・下巻三十四丁）。拾遺付追加三十六丁。白紙五丁（前一丁後二丁・下巻前後各一丁）。

校異は異文（語句の改訂に限られている）を示すことを主にしたので、書写上の単純な誤りと認められるものなど——明らかな衍字・脱字・

「の」と「か」、「り」と「る」、「り」と「く」、「ル」と「し」、「レ」と「ム」、「ニ」と「エ」と「コ」、「タ」と「ヌ」、「フ」と「ン」と「ラ」、「チ」と「テ」と「シテ」、「ソ」と「ヲ」、「ら」と「分」間の相違・音便、仮名遣い上の対立（「ん」と「ぬ」の相違を含める）・漢字の音や訓の通うもの・漢文体と漢文書き下し体の相違・漢語を受ける「は」「か」「の」「を」「に」の有無の対立・活用語尾の有無の対立——は省略した。

又、下段に、鹿児島県立図書館蔵本周辺の『庄内軍記』を「拾遺」の諸伝で改訂し、編集して、主に、成立したと見られる鹿児島大学附属図